山田さんは昔園田さんだった

仲村ゆうな

あらすじ

学生の葛巻健太（18）はバイト先の先輩、山田蛍（22）に恋をしている。ある日勇気を振り絞って告白するが、あっさりと振られる。自分が歳下だからかと問う健太に、蛍は意外な理由を話す。

自分はバツイチだから、と。

蛍は十八歳で結婚したものの、半年で夫が離婚届を残し失踪。離婚が成立した後も夫の帰りを待つかのように中之条で一人で生活をしていたのだった。

思いもよらない蛍の過去に困惑を隠せない健太だが諦めきれずアタックし続ける。しかし、まだまだ子供な健太を蛍はまともに取り合わない。

そんな中、二人が働く弁当屋に蛍の元夫の母親が偶然来店する。元義

母から行方知れずだった元夫が帰ってきたと聞いた蛍は、会いに行くことを決める。心中穏やかでない健太。しかし何も言えずに、蛍を送り出す。

めかしこんで義実家に向かう蛍だったが、その途中、ある決意をする。

登場人物表

山田蛍（22）　弁当屋のバイト

葛巻健太（18）　大学一年生。弁当屋のバイト

遠山哲（62）　弁当屋店主

遠山宏美（63）　弁当屋女将

園田聡子（54）　蛍の元義母

花本薫（22）　健太の大学の先輩女

○弁当屋・店内（夜）

レジを締める山田蛍（22）。

蛍をチラッと見ながら調理台を拭く葛巻健太（18）。

遠山哲（62）、厨房から顔を覗かせる。

哲「お二人さん、もう上がっていいよ」

健太「あ、はい」

遠山宏美（63）、のぼり旗を持って店内に入ってくる。

宏美「お疲れ様」

蛍「お疲れ様でした」

蛍、エプロンを外す。

哲「健太ー、蛍ちゃん送ってやれ」

宏美「そうね」

蛍「えー、いいですよぉ」

蛍、身支度をして出口に向かう。

哲「ほら、健太」

蛍「お疲れ様でーす」

蛍、出て行く。

健太「あっ」

健太、慌てて身支度をする。

○商店街（夜）

健太の声「山田さん！」

蛍、振り返る。

健太、自転車を押して追いかけてくる。

健太「送りますよ。夜、危ないんで」

蛍「全然大丈夫だよ？」

健太「山田さん女の子じゃないですか」

蛍「女の子って」

健太「女の子でしょ」

蛍「女の子って歳じゃないですよ。そうでしょう？　健太くんくらいの子たちにしたら」

健太「何気にそんな歳変わらないで

すよね」
蛍「えー、変わるよ」
健太「いうて三つ四つくらいでしょう」
蛍「健太くんはまだ十代でしょ？
十代と二十代の差は大きいなぁ」
健太「大きいっすか……」
蛍「うん」
健太「（息を吸って）……あの、俺」
健太、立ち止まる。
蛍「うん？」
蛍、健太の顔を見る。
健太「山田さんのこと好きです」
蛍「……ほぅ」
健太「付き合ってくれませんか」
蛍「うーん……」
健太「ダメ、ですか？」
蛍「……（微笑んで）うん、ダメ」
健太「俺が年下だからですか？」
蛍「（慌てて）あっ、ううん。違うの。

私がダメなの」
健太「え？」
蛍「私、バツイチだもん」
女の声「あれ……？　園田さん！」
蛍、振り返る。

○タイトル
『山田さんは昔園田さんだった』

○商店街（夜）
女、蛍に駆け寄る。
女「やっぱり園田さんだー！」
蛍「あー！　お久しぶりです。お元気でしたー？」
女「うん、元気元気！　園田さんも元気そうでー。今何してるの？」
蛍「商店街の弁当屋で働いてます」
女「そうなんだ！　みんなで話してたのよぉ。園田さん今何やってる

のかなーって」
蛍「（笑って）あ、今はもう園田じゃないですよ」
女「あ、そっか」
蛍「（自分を指差して）山田」
気まずそうにうつむいている健太。
女、健太をチラッと見る。
すぐに蛍に目線を戻して、
女「じゃ、また今度飲みに行こう」
蛍「いいですね」
女「また連絡する！」
蛍「はぁい」
女、手を振り去る。
健太、チラッと蛍を見る。
蛍、健太の視線に気づいて、
蛍「前の職場の人」
健太「あ、あぁ……」
蛍、歩き始める。
慌てて追いかける健太。

健太「あの、さっきのなんですけど」
蛍「うん、ごめんね」
健太「いや、あの、バツイチって」
蛍「うん」
健太「……からかってんすか？」
蛍「私は嘘つかないよ」
健太「（ボソッと）バツイチ……」
蛍「だから駄目なの。ごめんね」
健太「……」
蛍「今日はもうここでいいよ、おやすみ」
蛍、歩いていく。
健太「あ……」
健太、蛍の背中を見送る。

○ショッピングモール・アクセサリー店
アクセサリーを見ている花本薫（22）。
健太、スマホ画面をチラッと

見る。

健太「薫先輩」

薫「んー？」

健太「俺この後バイトなんですけど」

薫「えー、もうちょっと付き合って
ょぅ」

健太「いやもうそろそろ」

薫「あー！　こっちのリングも可愛
い！」

健太、ため息をつく。

気づいた店員、薫に近づく。

店員「こちらペアリングになってる
んですよー」

薫「へぇ！」

薫、健太の腕を引っ張る。

健太「（迷惑そうに）なんすか」

薫「これペアリングなんだって。健
太くん一緒につけよっか」

健太、嫌そうな顔をして薫の
手を振りほどく。

健太「先輩彼氏いるじゃないですか」
薫「別れそうだもん」
薫、ぎゅっと健太の腕に絡みつく。
薫「ほら、つけるだけつけてみて」
薫、無理矢理健太の左薬指に指輪をはめる。
諦めてされるがままの健太。
薫、自身の左手と健太の左手を見て、
薫「あ、いい感じー！」
薫と健太の左手薬指に輝く指輪。
薫「なんか結婚してるみたいだね」
健太「いや全然？」
薫「私の将来の夢、お嫁さんなんだよね」
健太「そーですか」
薫「あー、早く結婚したいなぁ。養われたーい」

健太「……」

○弁当屋・厨房（夕）

調理している哲。

弁当を詰めている健太、ため息をつく。

哲「なんだ元気ないなぁ、健太」

健太「店長ー」

哲「うん？」

健太「山田さんがバツイチって知ってました？」

哲「（キョトンとして）お前知らなかったのか」

健太「え、あ、はい」

哲「十八の時に結婚してなぁ」

健太「え、そんなに早く？　あの、じゃあ、（こそっと）山田さんってシングルマザーとかなんですか？」

哲「いいや、子どもはいない」

健太「え、じゃあ何で」
哲「さあなぁ。当時はもう大騒ぎよ。結局蛍ちゃんが親と絶縁してまで結婚したってんだから」
健太「壮絶……。その、相手って」
哲「蛍ちゃんが高校生の時から付き合ってた奴。こっちじゃちょいと有名なヤンチャ坊主でな」
健太「へ、へぇ」
哲「これが甲斐性なしの男でさぁ、ある日突然、離婚届置いて出てっちゃって」
健太「えっ」
哲「そのまんま行方知れずよ。ほんと蛍ちゃんも馬鹿な男に惚れたもんだよなぁ」
健太「なんで店長はそんな知ってんすか」
哲「商売やってりゃあいろいろ集まってくんのよ」

宏美「こらっ！　何油売ってんの」
哲「へいへい」
宏美「本人がいないところでそんな話しないの」
宏美、健太をじっと見つめる。
宏美「健太」
健太「（背筋を伸ばして）はい」
宏美「蛍ちゃん幸せにしたいなら、相当の覚悟が必要だよ」
健太「はい……」
蛍、入ってくる。
蛍「お疲れ様でーす」
宏美「おぉ、蛍ちゃんお疲れ」
蛍「今日もよろしくお願いします」
宏美「はいよろしくー」

× × ×

健太、チラチラと蛍を気にしながら調理場を片付けている。
背中合わせに蛍、洗い物をしている。

蛍「なんか私の話聞いてたでしょ」
健太「……すみません」
蛍「気になるの？」
健太「そりゃ、まぁ、はい」
蛍「だよねぇ。どこまで聞いた？」
健太「山田さんが十八の時結婚して、
そんで……」
蛍「旦那が消えたとこまで？」
健太「……はい」
蛍「馬鹿な女って思ったでしょう。
そんな若い時に結婚して挙句離
婚って」
健太「思ってないです！　むしろ
……」
健太、むすっとして、
健太「むしろその旦那の方が馬鹿じ
ゃないですか？　結婚しといて逃
げるみたいな」
蛍「そうかな」
健太「そうですよ！　なんでそんな

クズみたいな男……。俺だったら――」

健太、蛍の方を振り向く。

と、包丁が健太の足元ギリギリに落ちる。

ギョッとして蛍を見る健太。

蛍「あ、ごめん」

蛍、へらっと笑って、

蛍「手滑っちゃった」

○大学・部室

健太、入ってくる。

座っていた薫、気づいて、

薫「お疲れー」

健太「お疲れさまです」

薫の左手薬指に指輪。

健太、それを見て、

健太「彼氏さんと仲直りしたんですか？」

薫「ん？」

薫、健太の視線に気づいて、
薫「あぁ、これ？　違う違う。これ
元彼の」
健太「え？」
薫「なんか久しぶりにつけたくなっ
ちゃって」
健太「未練あるんですか？」
薫「んー、どうかなぁ」
健太「無いんだったらなんで」
薫「うーん。好きは好きだよ。（考え
込んで）……うん、好き」
健太「別れたのに？」
薫「まぁねぇ。喧嘩別れだったんだ
けどねぇ」
薫、ニコッと笑って、
薫「好きで居続けたいの、私が」
健太「よく、分かんないっす」
薫「健太くんって意外と恋愛経験少
ないよね」
健太「余計なお世話です」

薫「教えてあげたくなっちゃう。ね、今度デートしよっか」
健太「しないっす。……俺好きな人いるんで」
薫「えー、ほんと？　同じ学部？」
健太「違います」
薫「なになにー？　気になるー。恋バナしよ」
健太「……聞いていいですか」
健太、薫の向かいに座る。
薫「なぁに？」
健太「もし俺が先輩の元カレの悪口言ったら、どう思いますか」
薫「死ねって思う」
健太「死っ……？！」
薫「だってあの人のこと悪く言っていいのも好きでいていいのも、私だけの特権なんだもん。でしょう？」
健太「ま、まぁ……」

薫「部外者の健太くんが口挟むこと
じゃないと思うよ？」
健太「はい……」
薫「言っちゃったんだ？」
健太「いや別に」
薫「（ケラケラ笑って）最低ー」
健太、気まずそうに頭を掻く。

○弁当屋・厨房（夕）
背中合わせに作業している健
太と蛍。
健太「あの、山田さん」
蛍「んー？」
健太「その、この間はすみませんで
した」
蛍「何がー？」
健太「いや、あの」
聡子の声「すみませーん」
蛍「いらっしゃいませー」
健太「あ……」

蛍、店頭に出ていく。

○同・店内（夕）

蛍「お待たせしましたー」

聡子「あの表に書いてあった日替わり帰り弁当っていうの……」

蛍、園田聡子（54）の顔を見て固まる。

蛍「お義母さん……」

聡子「（驚いて）蛍ちゃん？」

蛍「びっくりした」

聡子「ここで、働いてたのね」

蛍「はい。お義母さんは何で？」

聡子「たまたまこっちに用事があったから」

哲、厨房から顔を覗かせる。

哲「えっ、蛍ちゃんのお母さん？」

蛍「あ」

哲「どうもー、いつも蛍ちゃんにはよく働いてもらって」

苦笑いする聡子。

蛍「あ、違う違う店長。あの、前のお母さん。元旦那の」

哲「あっ、あー……」

蛍「うん」

○同・厨房（夕）

健太、手を止め蛍の方を見る。

○同・店内（夕）

宏美「ご、ごめんなさいねー！　ごゆっくりー！」

宏美、慌てて哲を厨房に引っ張っていく。

顔を見合わせて苦笑いする蛍と聡子。

○同・厨房（夕）

宏美「バカッ」

宏美、哲の肩を叩く。

哲「だってよぉ……」

宏美、ブツブツ言う哲を奥へ追いやる。

健太、チラチラと蛍の方を見る。

○同・店内（夕）

聡子「元気そうでよかった」

蛍「お義母さんも。あ、今日の日替わり、コロッケですよ」

聡子「じゃあ三つ、もらおうかな」

蛍「三つ……。（笑顔を作って）はい」

聡子「あのね、蛍ちゃん」

蛍「……」

聡子「帰ってきたの、亮平」

蛍、手が止まる。

聡子「連絡来てた？」

蛍「（笑って）いえ」

蛍、弁当を袋に詰める。

聡子「そんなことだろうと思った。

帰ってきたのもね、また急にふらっとよ？　びっくりしちゃった」

蛍「あはは」

聡子「いつまでも変わらないのね、あの子は」

蛍「……はい、三百円です」

聡子、お金を渡し袋を受け取る。

聡子「あの、良かったら今度うちでご飯食べない？　亮平も夜ならいるから」

○同・厨房（夕）

健太、心配そうに蛍の横顔を見つめる。

○同・店内（夕）

聡子「一度ゆっくり……。会いに来て？」

蛍「……はい」

○商店街（夜）

並んで歩いている健太と蛍。

健太「行くんすか、元旦那ん家」

蛍「聞いてたんだ」

健太「すみません」

蛍「うん、行くよ」

健太「……へぇ」

蛍「何？　どうしたの？」

健太「いや……」

蛍「行くな、とか言いたいの？」

健太、こくりと頷く。

蛍「あはは」

健太「俺が口出しすることじゃないのは分かってます」

蛍「分かってるなら出さないで？」

健太「でも、俺……」

蛍「健太くんってさぁ、私のどこが好きなの？」

健太「えっ！」

蛍「どこ？」
健太「あっ、あの、えっと、なんか、こう、自立した女性って感じが」
蛍、鼻で笑う。
蛍「……健太くんはさぁ、私のこと買い被りすぎだよね。というか夢見すぎ？」
健太「え……」
蛍「自立してる？　何見て言ってんの」
健太「いやだって……。しっかりしてるじゃないですか、山田さん」
蛍「そんなことないけどね」
健太「そんなことありますよ」
蛍「まぁ、仕事はね。ちゃんとやりますよ。でもそれしか知らないでしょ？」
健太「え？」
蛍「私は誰かに依存しないと生きてけないから」

健太「そうなんですか？」
蛍「うん」
健太「……今でもその元旦那に依存してるんですか」
蛍「かなぁ」
健太「俺にすればいいのに」
蛍「うん？」
健太「頼るんだったら、俺にしてください」
蛍「……ほんとに？」
蛍、健太の胸ぐらを掴み、顔を近づける。
固まる健太。
唇が触れそうな蛍と健太。
蛍、笑って、
蛍「あは、変な顔」
蛍、健太から離れ歩き始める。
呆然と突っ立っている健太。

○弁当屋・厨房（夕）

ぼーっと調理器具を拭いている健太。
蛍、顔だけのぞかせる。
蛍「（コソッと）健太くん」
健太「（ビクッとして）はっ、はい？」
蛍、恐る恐る出てくる。
ワンピース姿で髪を下ろしている蛍。
蛍「これ、変じゃない？」
健太「可愛い……。全然！　全然変じゃないですよ！」
蛍「んーと、そうじゃなくて……」
健太「え？」
蛍「健太くんの感想じゃなくて、こう、世間一般の男子的に」
健太「……（気づいて）あぁ、いいんじゃないですか」
蛍「ほんとに？」
健太「（棒読みで）可愛いって思ってもらえると思いますよ」

蛍「よかったぁ」
哲「蛍ちゃん、できたよー」
哲、蛍に袋を渡す。
哲「メンチ、ハムカツ、かぼちゃコロッケ」
蛍「ありがとうございます。あ、今お金……」
宏美「いいのいいの、美味しく食べてもらえれば」
蛍「でも」
宏美「今日の蛍ちゃん素敵よ。ほら、いってらっしゃい」
蛍「ありがとうございます。いってきます」
健太「いってらっしゃい……」
蛍、出て行く。
哲、健太の背中を思いっきり叩く。
健太「いたっ」
哲「『行くな』ってぐらい言えよ」

健太「無理ですよ、あんなウキウキしてんのに」

○住宅街（夕）

並んで歩いている蛍と聡子。

聡子「蛍ちゃんと一緒にご飯なんていつぶりかしら」

蛍「ほんと。昔はよく料理教えてもらって。大変お世話になりました」

聡子「いいえ。私も娘ができたみたいで楽しかったわ。あの頃が本当に懐かしい」

蛍「はい」

聡子「……あのね、蛍ちゃん」

蛍「はい？」

聡子「もう一度、亮平にチャンスをくれない？」

蛍「え？」

聡子「一度はあの子の勝手でこんなことになっちゃったけど、きっと

また、昔みたいに戻れると思うの」
蛍「……」
聡子「蛍ちゃんと結婚するってなった時、正直びっくりした。でもね、二人を見てたら年齢なんか関係ないんだって思えたの。だって、本当に幸せそうだったから」
聡子、目に涙を浮かべる。
聡子「蛍ちゃんと一緒にいるあの子も楽しそうで……」
聡子、蛍を見つめて、
聡子「お願い……。私からのお願いよ……」
蛍「お義母さん……」
蛍、微笑む。
蛍の横を通り過ぎる二人乗りした自転車。
高校生の男女カップルが乗っている。
それを目で追う蛍。

蛍「……」
聡子「蛍ちゃん？」
蛍「……お義母さん、私やっぱり帰ります」
聡子「え？」
蛍「遠慮しときますね」
聡子「そんな遠慮なんてしないで」
蛍「（首を横に振る）やっぱり行かない」
聡子「どうして……」
蛍「だって、亮ちゃんに呼ばれてないもん」
蛍、聡子に笑ってみせる。

○商店街（夜）

とぼとぼ自転車を押しながら歩いている健太、ため息をつく。
視線の先に、前を歩く蛍。
健太、気づいてじっと見る。

健太「山田さん？」

健太、蛍の方に駆け寄って、

健太「山田さん！」

蛍、気づいて振り返る。

微笑み、また前を向いて歩く。

健太「山田さん！」

健太、蛍を追いかける。

健太「うぉっ！」

タイヤに足を引っ掛け派手に転ぶ。

健太「イタタ……」

健太、膝をさする。

健太「クッソ……」

蛍の声「何やってんの」

健太、見上げると蛍が立っている。

微笑む蛍。

蛍「ばか」

× × ×

並んで歩く健太と蛍。

健太、蛍が下げている袋を見る。

健太「今帰り、ですか？」

蛍「ん？　あぁ、行くのやめた」

健太「どうして」

蛍「どうして？　どうしてだろうね。なんか、行かない方がいいかなって」

健太「そうですか……」

蛍「……私ね、高校卒業してすぐ結婚したの」

健太「はい」

蛍「周りにはめちゃくちゃ反対された。若すぎるって。でも家族が欲しかったんだよね」

ピンと来ていない健太。

蛍、笑って、

蛍「うちさぁ、もともと家族で仲悪くって。なんでこんな家に生まれんたんだろーってずっと思って

た。だから、自分が選んだ家族が欲しかったんだ」
健太「旦那っていうことですか？」
蛍「うん。だって選べる家族って夫婦くらいでしょ？」
健太「まぁ、はい」
蛍「そしたら亮ちゃ……元旦那ね？いいよーって言ってくれたの」
健太「そんで結婚したんですか」
蛍「うん。で、逃げられた」
健太「どうして……」
蛍「まぁ、背負いきれなかったんじゃない？　（笑って）結構私重い女だし」
健太「そんな……。ひどくないですか」
蛍「分かってはいたのよ。すぐうまくいかなくなって、すぐ離婚するんだろうなって。実際そうだったしね。でも、結婚したかったの。

……だから、結婚したの」
健太「今でも、好きなんですか」
蛍、頷く。
健太「ひどいことされたのに？」
蛍「だって幸せだったんだよ？　誰かのためにご飯作るのも、シャンプーを詰め替えるのも、すっごくすっごく幸せだった。分かる？」
健太、首を横に振る。
蛍「あはっ」
蛍、息を吐く。
蛍「でももうやめるの」
健太「え」
蛍「もう好きでいるのやめにする。やめれるんだもん。（涙がこみ上げてきて）もう、やめる」
蛍、涙が溢れる。
蛍「（か細い声で）もう……好きじゃない」
しゃくり上げて泣く蛍。

健太「……そしたら、俺とのことを考えてくれるんですか？」
蛍「（鼻をすすって）そうは言ってないよ」
健太「すみません……」
蛍、プッと吹き出す。
蛍「はいはい。考えておくね」
健太「お願いします」
蛍、ワンピースの襟ぐりで涙を拭く。
蛍「あーあ」
蛍、袋からコロッケを取り出し健太に差し出す。
蛍「ん」
健太「ども」
健太、会釈して受け取る。
蛍、袋からもう一つコロッケを取り出し頬張る。
食べながら並んで歩く蛍と健太。

【終】